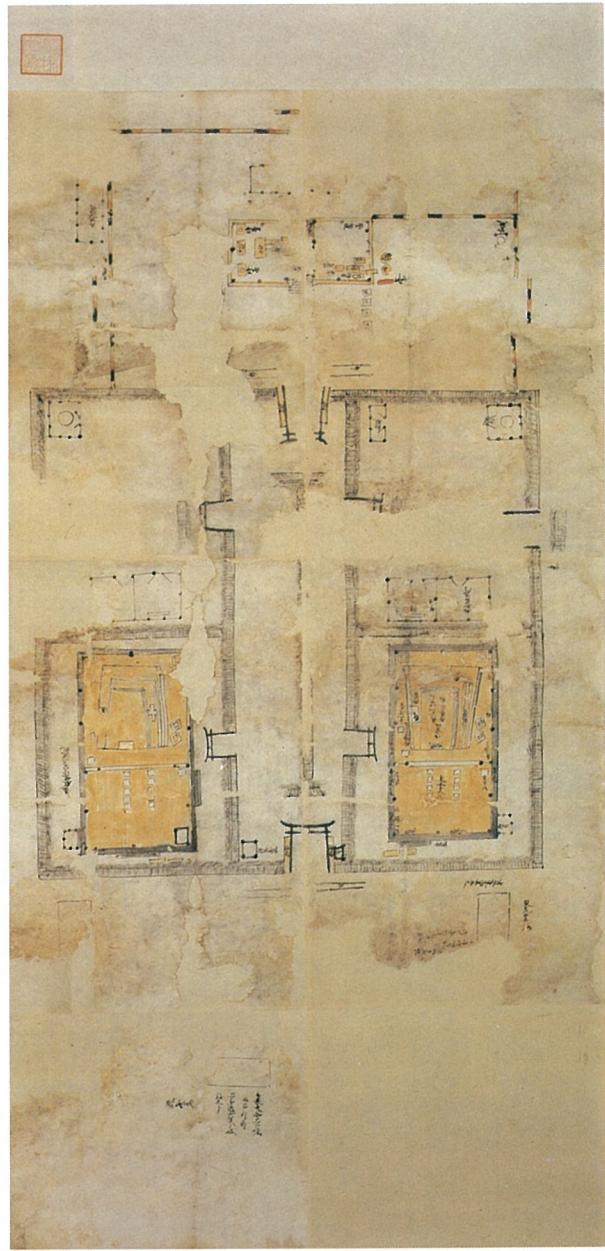


平成三年一月十六日～十九日

# 大嘗会関係資料展示目録

宮内庁書陵部





15 大嘗宮并廻立殿指図 墓志元年

15 大嘗宮并廻立殿指図 暦応元年  
淡彩を施した大嘗宮（悠紀・主基両殿）  
及び廻立殿の指図。本紙中に「大嘗 □  
□ 殿指図暦応元」とみえるところから、  
暦応元年（1338）11月19日に行われた光  
明天皇の大嘗会に際しての大嘗宮の指図  
と考えられ、紙質・筆跡等からみて、少  
なくとも南北朝期の書写にかかるものと  
推定される。九条家旧蔵本。もと折り畳  
んだ状態で伝来してきたが、当部で現状  
のように修補・成巻した。現在一般に知  
られる大嘗宮の平面図は、近世以降のもの  
のがほとんどで、中世以前に遡るものと  
して本指図の存在は極めて貴重なものと  
いえる。なお、柳原紀光の編になる『統  
史愚抄』に同日の記事を載せ、その典拠  
のひとつとして「図絵」なるものの存在  
を掲げており、あるいは、それが本図で  
あった可能性もあるが今のところ断定は  
できない。

## はじめに

このたびの即位の大典を記念して、当部で所管する大嘗会関係資料を展示することとした。総数29件、そのうち20までが古代・中世の記録、古文書類、21以降が近世の絵図、和歌類である。

大嘗会に関して現存する史料の初見は『日本書紀』天武天皇2年(673)で、以下『続日本紀』などの六国史に、『扶桑略記』などの私撰史書が加わる。これらの編纂書にたいし、実際の大嘗会に直接関与した人々の実行・見聞の記録類は、朱雀天皇承平度(932)からで、当時摂政であった藤原忠平の記『貞信公記』が知られている。

当部には伏見宮・九条家旧蔵等図書のなかに宸記・御記をはじめ、古記録類の原本・善本が多数あり、諸研究の基礎史料となっている。これらのうちから大嘗会関係の記述書を選んで展示の主題とした。大嘗会の全体を示す儀式書類ではないが、平安期から室町期におよぶ長い年月のうち、その各々の時点で大嘗会に關与した先人たちの事績の一端を知る貴重な原史料である。宸筆として伏見天皇7～9、花園天皇14、御筆として貞成親王18、19がある。2は御禊行幸の記事のみであるが、記録の初見『貞信公記』の抄出文に、『外記記』『重明親王記』の逸文を加えている。5は幼い崇徳天皇を補佐した摂政藤原忠通の貴重な体験記、その忠通には4、6も関連がある。7は『後鳥羽院宸記』を伏見天皇が宸写されたもので、『後鳥羽院宸記』の散逸した現在、最古写本となっている。記者の身分から見れば、天皇7～9、14、親王2、18、19、摂関2、4～6、大臣4、納言・参議2、3、11～13、蔵人・外記2、10、12、と多様であり、記事は昼間に行われて注目を集めた御禊行幸の供奉や見物記2、8、10～12、14、秘儀といわれている卯日の悠紀・主基両殿に天皇自らが供えられる神膳の作法3、5～7、9など貴重なものが多い。また、光明天皇暦応度(1338)の指図15や叙位簿16、成柄17などの古文書類も数少ない南北朝期の遺品である。

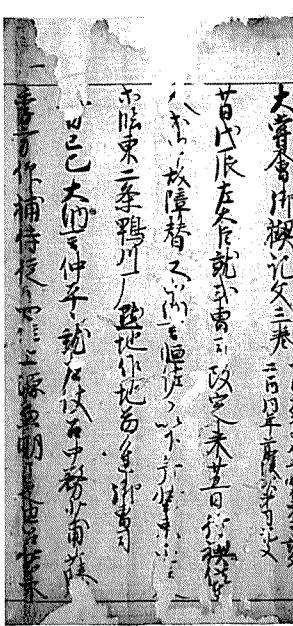
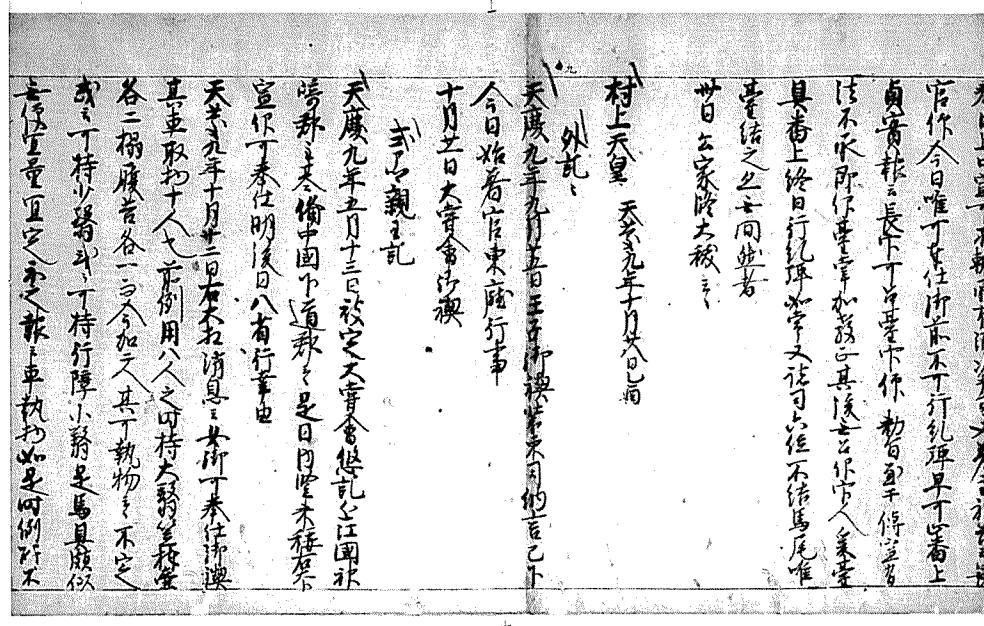
後土御門天皇文正度(1466)を最後に、220余年ぶりに再興された東山天皇貞享度(1687)以降(つぎの中御門天皇の代は再び行われず)は、前代と比較して多量の関係資料が残っているが、これらのうち貞享度の立起図の一部22と調進物絵図23、24、明治期製作の行事図29及び中絶後和歌関係では初度となった桜町天皇元文度(1738)の屏風和歌の詠進原本とその作者の日記25、26などを加え、大嘗会の視覚的理義の一助とした。

### 1 大嘗会代々例 平城天皇—後土御門天皇

平安遷都以後、最初の平城天皇の大同3年（808）から、応仁・文明の兵乱により中絶する直前の後土御門天皇の文正元年（1466）まで、54代にわたる大嘗会の国郡卜定・御禊・会当日の年月日、上卿・節下の大臣名、国郡名などを、各天皇ごと（即位年月日を朱書）に列挙する。後花園天皇を院（文明2年12月崩御）、後土御門天皇を当今と表記していることから、応仁元年—文明2年間（1467—70）の成立と考えられる。筆者は、卷末九条道房（江戸初期）の識語に「慈眼院殿御筆」とあり、当代九条家の当主政基（権大納言→右大臣）である。動乱のなかで次代の大嘗会の参考に備えようとしたものと思われる。類書として『群書類従』公事部に「大嘗会御禊日例」（平城天皇—後一条天皇）、「大嘗会御禊事」（平城天皇—花園天皇）がある。九条家旧蔵本。



1



2

平城天皇  
大同二年丁未十月戊午御禊  
同三月戊午十月己未御禊  
同十一月太嘗會

光明院  
元年四月壬午御禊  
同十月己未御禊  
同十一月太嘗會

弘仁十四年庚午十月廿三日卯御禊  
同十月己未御禊

仁明  
天長十年癸未十月十九日乙巳御禊  
同十一月太嘗會

文德  
仁壽元年庚午七月廿六日甲子御禊  
同十一月太嘗會

真觀元年戊午十月廿四日辰四點御禊  
同十一月太嘗會

陽成  
元慶元年庚午十月廿九日丙寅御禊  
同十一月太嘗會

孝  
和四年庚午十一月廿八日壬辰御禊  
同十一月廿三日太嘗會

德明  
元年十一月廿九日己未御禊  
同十一月太嘗會

德明  
元年十一月廿九日己未御禊  
同十一月太嘗會

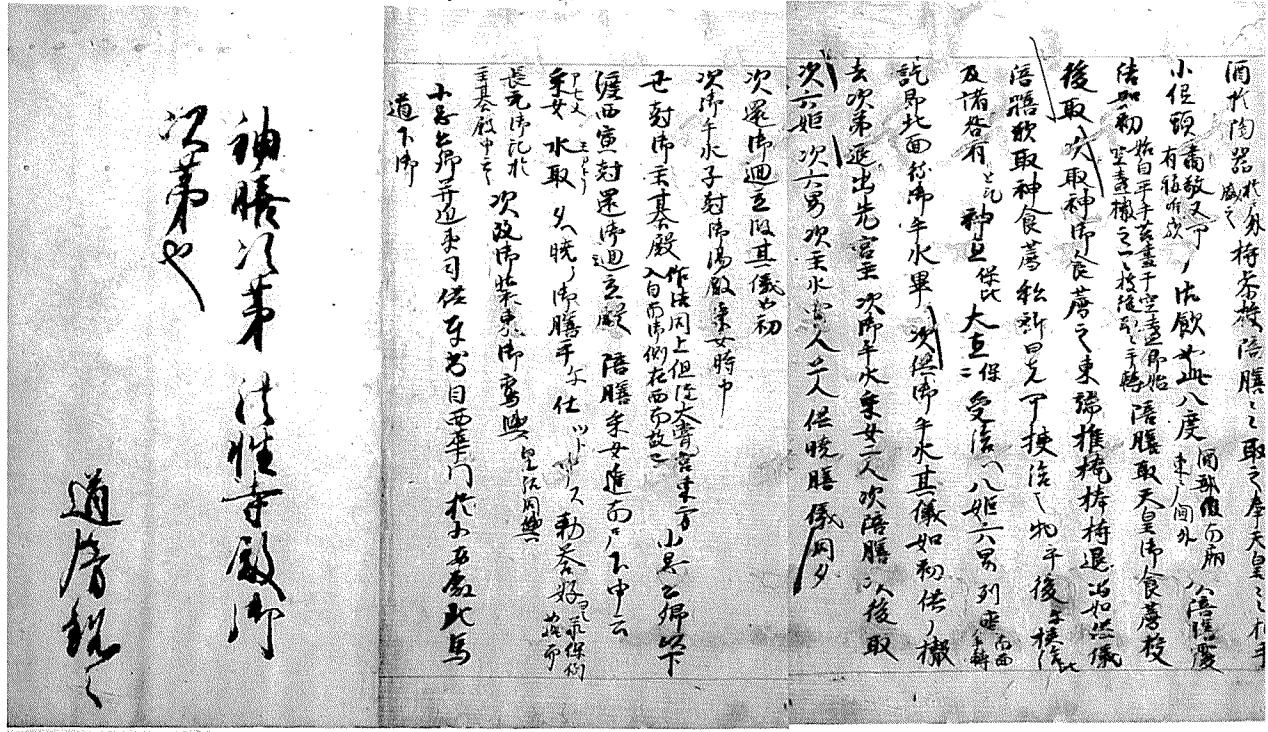
光嚴  
元年十一月廿九日己未御禊  
同十一月太嘗會

光明院  
元年十一月廿九日己未御禊  
同十一月太嘗會

光明院  
元年十一月廿九日己未御禊  
同十一月太嘗會

## 2 大嘗會御禊部類記 承平2年 天慶9年

大嘗會に先立つほど1箇月前頭に行われる鴨河原での天皇のみそぎの行事について、諸家日記を抄出編集した書。鎌倉期写。(1)朱雀天皇、承平2年(932)10月25日(御禊当日)、外記記・式部卿親王記(吏部王記、重明親王記)・貞信公記(摂政藤原忠平記)の3種。(2)村上天皇、天慶9年(946)10月28日(御禊当日)、外記記・式部卿親王記・九条殿記(九暦、当時大納言藤原師輔記)・小一条左大臣記(参議藤原師尹記)の4種。六国史等編纂史書を別にすれば、(1)(2)ともに記者の身分により多角的な内容となっている。また、抄出文ながら逸文として貴重な日記類である。九条家旧蔵本。

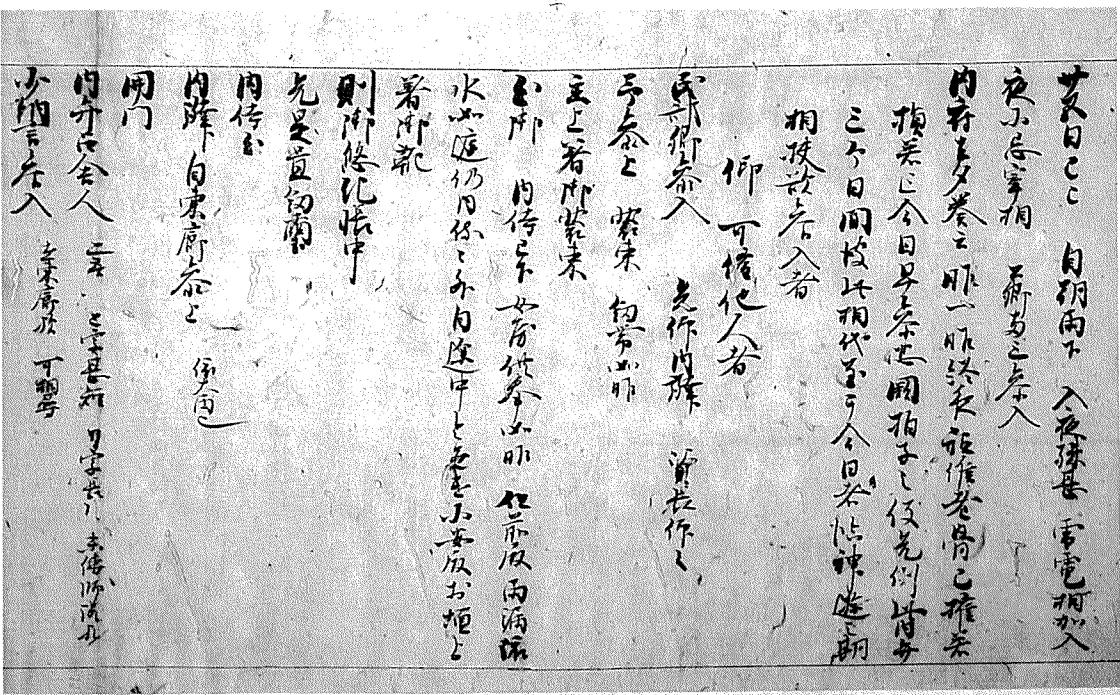


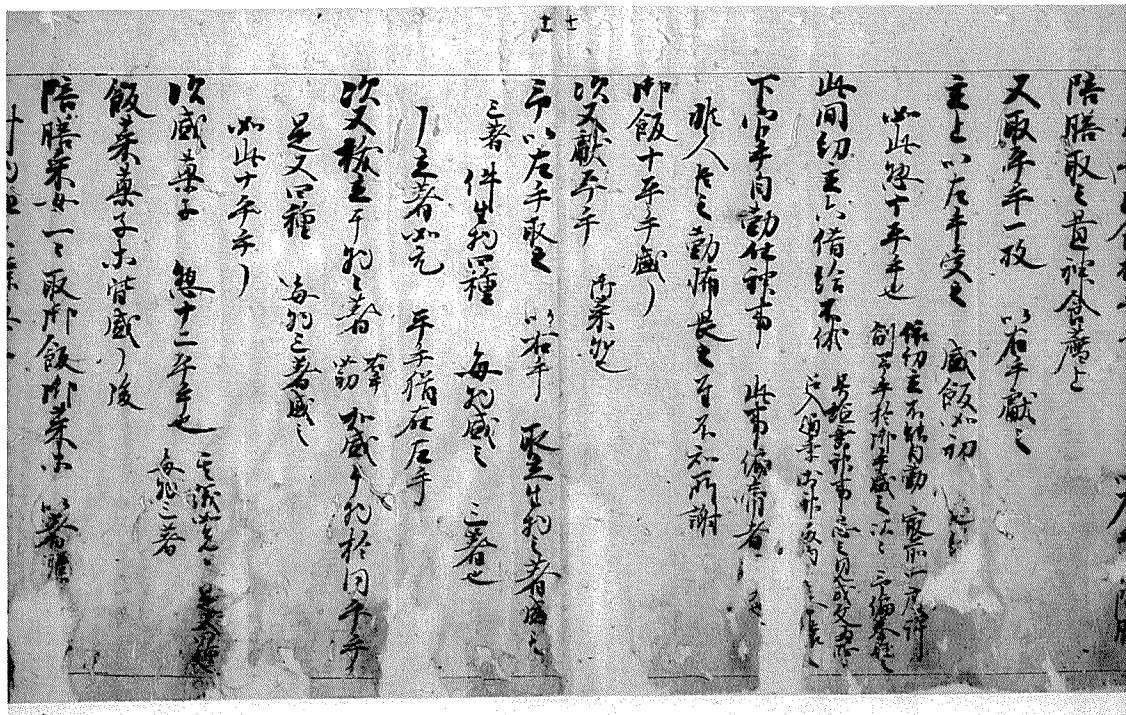
### 3 大嘗会神膳次第 天仁元年11月 江記抜書

鳥羽天皇の大嘗会の神膳供の次第を、大江匡房（当時前権中納言、大宰権帥）の日記『江記』天仁元年（1108）11月21日条のうちから抜き書きした書。鎌倉期写。天皇の親供の様子が詳細に記されている。抜き書きながら『江記』の現存最古写本。巻末の識語で九条道房は、本書を「法性寺殿御次第也」としているが、藤原忠通（法性寺殿）は崇徳天皇の摂政で、その大嘗会催行を補佐しており（5, 6）、本書の親本を作成したことは充分考えられる。なお、匡房には公事の儀式書『江家次第』の著作があり、王朝の故実書として後代に至るまで活用されているが、大嘗会についても御禊以下全般にわたって記述している。九条家旧蔵本。

4 大嘗会記 治暦4年 師実公記  
久寿2年 忠通公記

久寿2年(1155)11月24—26日の後白河天皇の大嘗会辰・巳・午日の次第を、時に関白であった藤原忠通が記録した1巻。忠通の曾祖父師実が、治暦4年(1068)11月の後三条天皇の大嘗会の卯・辰・巳・午日の次第を詳記した記録が前半同筆で写されている。また、忠通記の5も本巻に継がれていたことが本巻々頭の目次書から分かるが、全て平安末期の写である。なお、久寿度の巳日は雷雨であった様子が記され、興味深い。九条家旧蔵本。

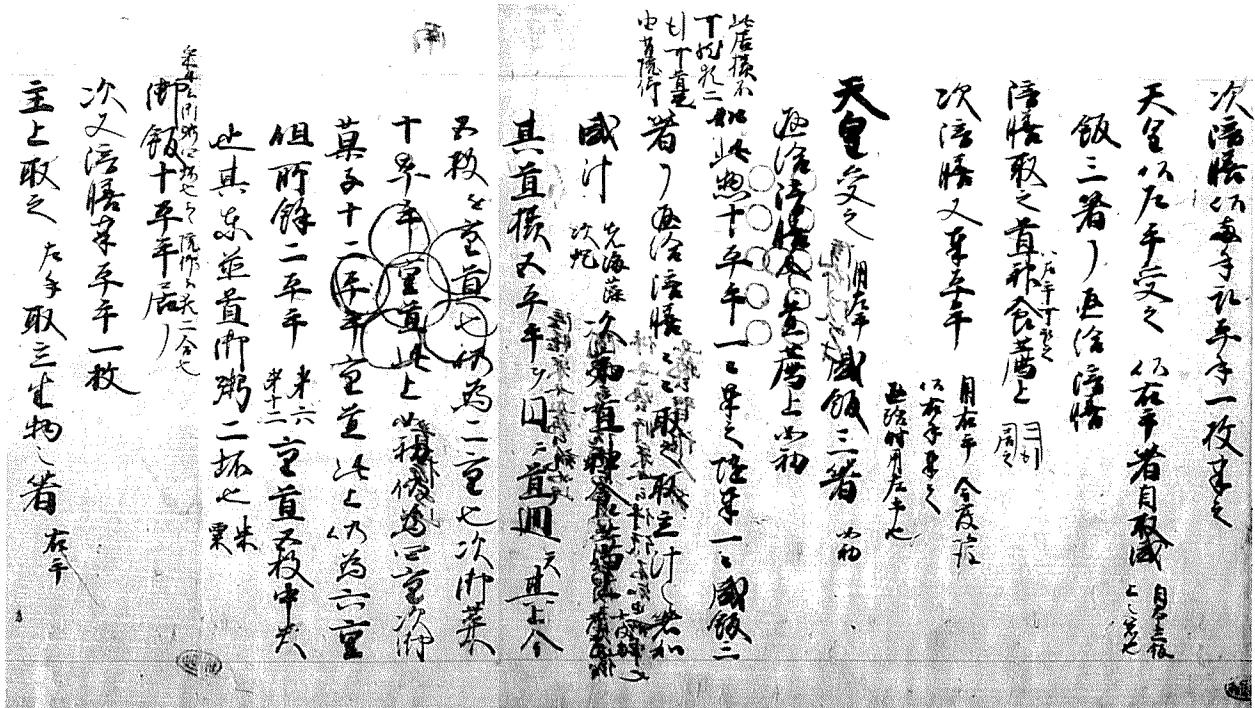




5

## 5 大嘗会卯日御記 保安4年11月

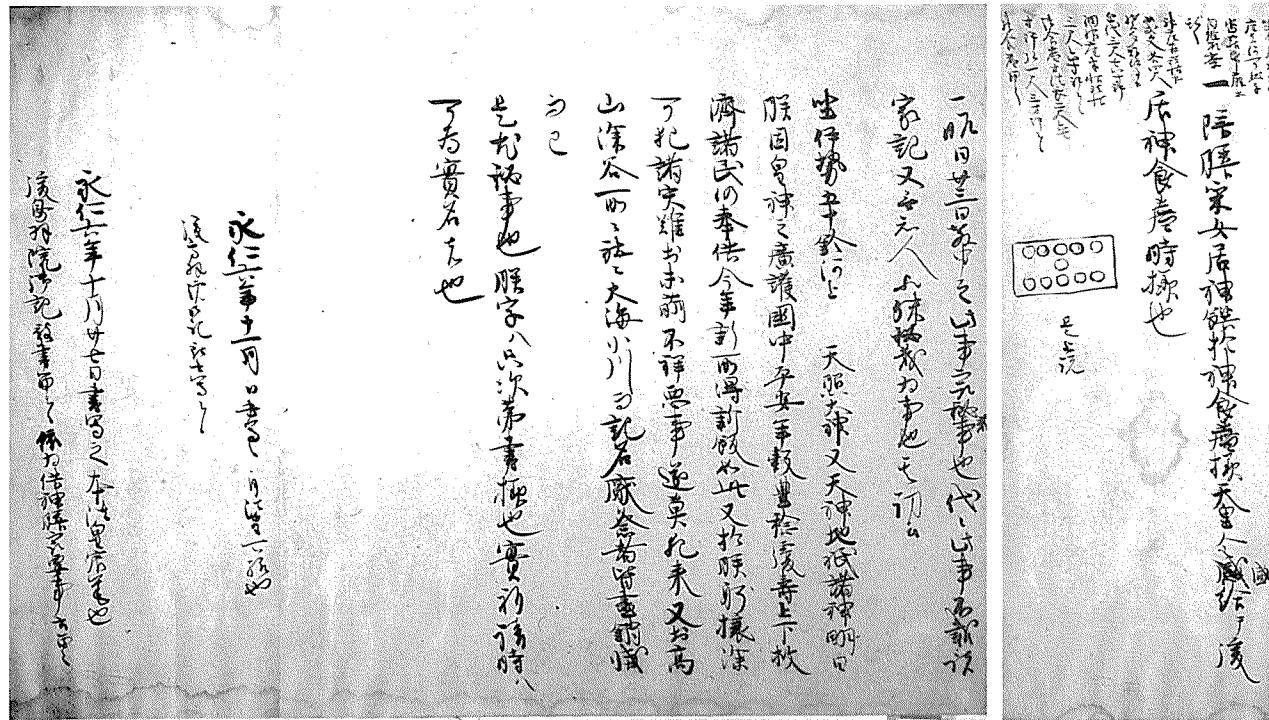
保安4年(1123)11月18日の崇徳天皇の大嘗会卯日の神膳親供の作法を中心とした次第を藤原忠通が記録した1巻。平安末期の写で、もと4と同巻に継がれていた。時に天皇御年5歳、「六借」<sup>むつかり</sup>そして「不能自勤」のを摂政であった忠通が代って勤仕した様子が生々しく記されている。また「此事偏帝者所為也、非人臣之勤、怖畏之至、不知所謝」との感想を懷いて白河法皇に伺いをたてるなど、幼帝の摂政の立場も述べられている。旧表紙見返しの九条政基の識語を信じれば、本書は忠通が禁裏に進上した際に写し留められたという。九条家旧蔵本。



6

## 6 大嘗会次第 保安4年11月

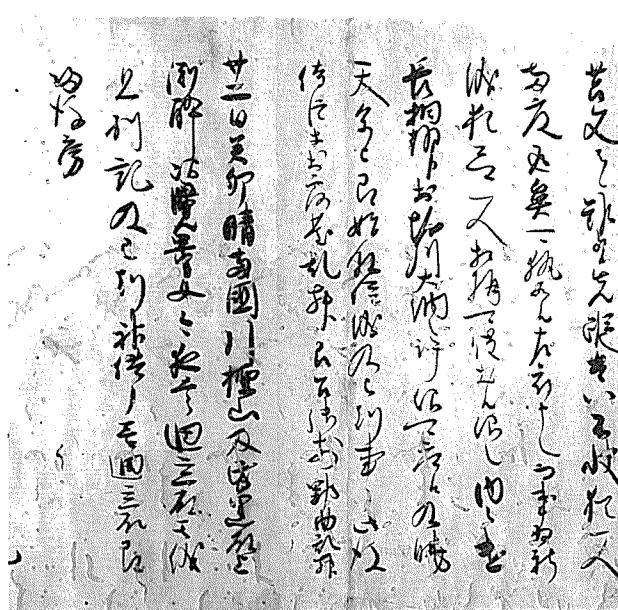
保安4年11月18日（卯日）から始められる崇徳天皇の大嘗会の準備のために、時の摂政藤原忠通が後朱雀・白河・堀河天皇などの大嘗会の先例書および白河法皇に尋ねて作成した次第書。卯日1巻、辰巳午日1巻の2巻が伝存し、共に鎌倉初期写。展示箇所は、大嘗会の中心となる卯日の神膳親供の場面で、神饌を盛る「平手」の扱い方が詳述されており、裏書としてその置様が図示されている。九条家旧蔵本。



7

### 8 御禊大嘗会御記 正応元年10月-11月

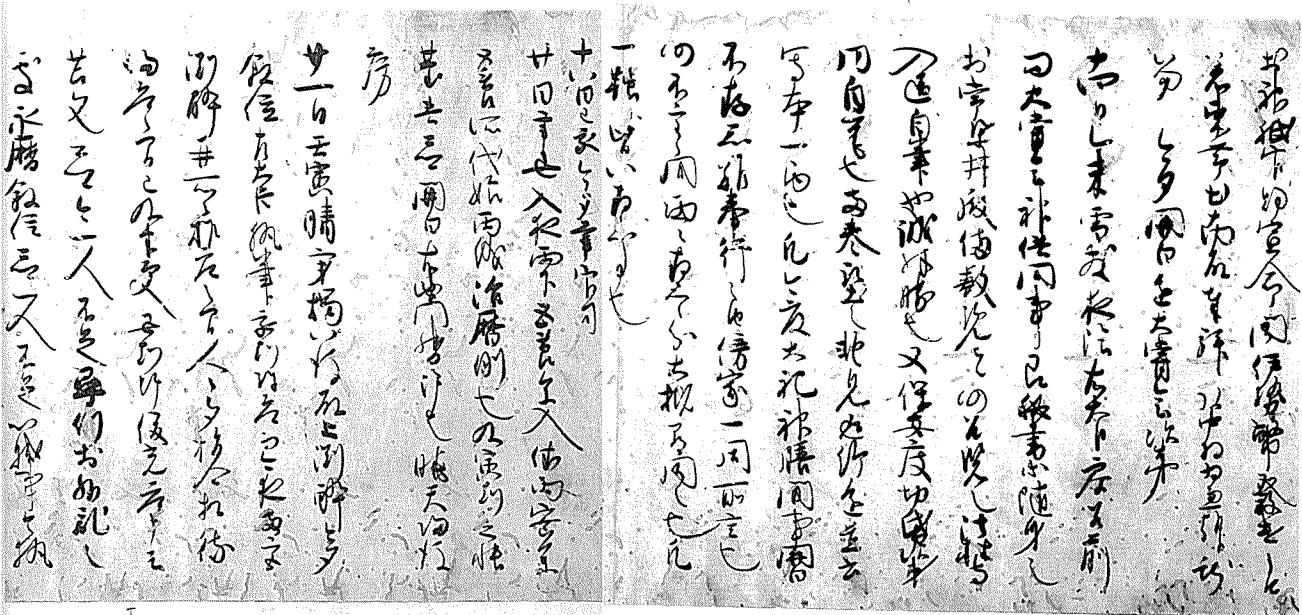
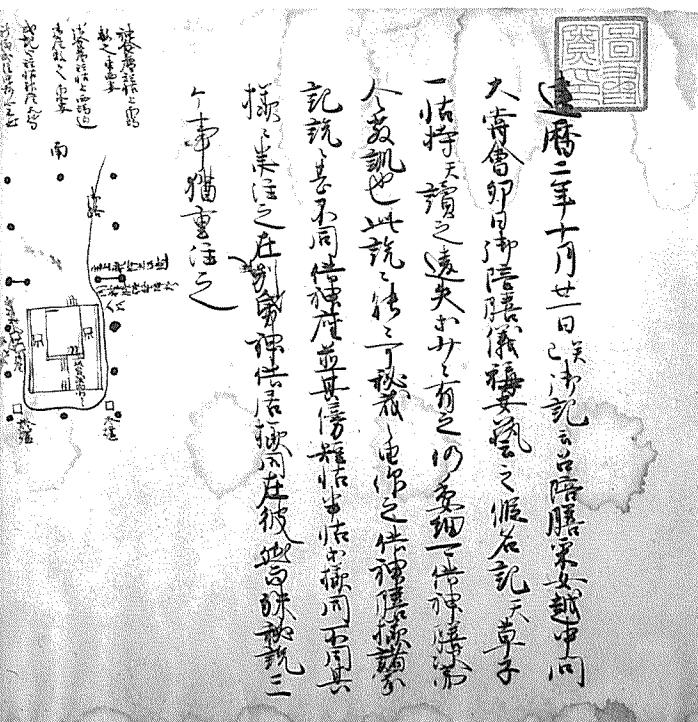
伏見天皇が御自身の大嘗会関係の記録を集め、記されたもの。10月12日から11月28日迄の記文があるが、すべて大嘗会関係の記事であり、内側から見たその経過が知られる。正応元年（1288）の宸記の中宸筆で残るものは、首次ではあるが1月1日から3月29日迄の春1巻、及び、琵琶伝授記中の5月21日条と、この記、そして9の別記断簡のみである。展示箇所は、11月14日から卯日当日迄の日次記で、14日条の神供問事に関して、「法性寺入道自筆也」とあるものは、崇徳天皇のための大嘗会卯日の次第と推定され、当部にその鎌倉期の写本6がある。20日丑日は、五節舞姫の参入、帳台の試み、前日寅日は大嘗会のための「叙位」が催された。卯日は「覽童女」と共に、大嘗会神饌儀が行われたが、「其儀見別記」とある。これが9の別記である。伏見宮旧蔵本。



8

7 後鳥羽院御記 建暦2年10月

後鳥羽天皇の宸記抄出1巻。後鳥羽天皇の宸記は、現在では部分的に写本でしか知ることができないが、本巻は、その中でも最古写本といえる善本で、伏見天皇の宸筆にかかる。伏見宮旧蔵本。本記は、流布本では『卯日神膳次第』『建暦御記』とも称されている。内容は、天皇の皇子順徳天皇の大嘗会に際して書き留められたもので、建暦2年(1212)10月21日及び25日の記事を取める。21日の記事では、大嘗会卯日御陪膳儀の秘説を記し、大嘗宮内での順路図及び平手の置き方二説の図を付す。また、25日の記事では、「殊秘藏事」とされる大嘗宮内での申詞を記しており、秘儀とされる儀式の一端を知ることができる。なお、巻末には、永仁6年(1298)10月及び同11月の伏見天皇の書写奥書があり、本巻は後深草院所持本よりの転写本であることが知られる。伏見天皇は、皇子後伏見天皇の大嘗会に際して書写したものと考えられる。



大嘗會御記正應元年11月  
 遂于時辰於三歲事遂紀佛  
 每事辛力偏佛蒙宗廟之加護而無事也  
 諸中天院雲晴之神保列限陰晴  
 天氣清澄真誠无一失焉

9





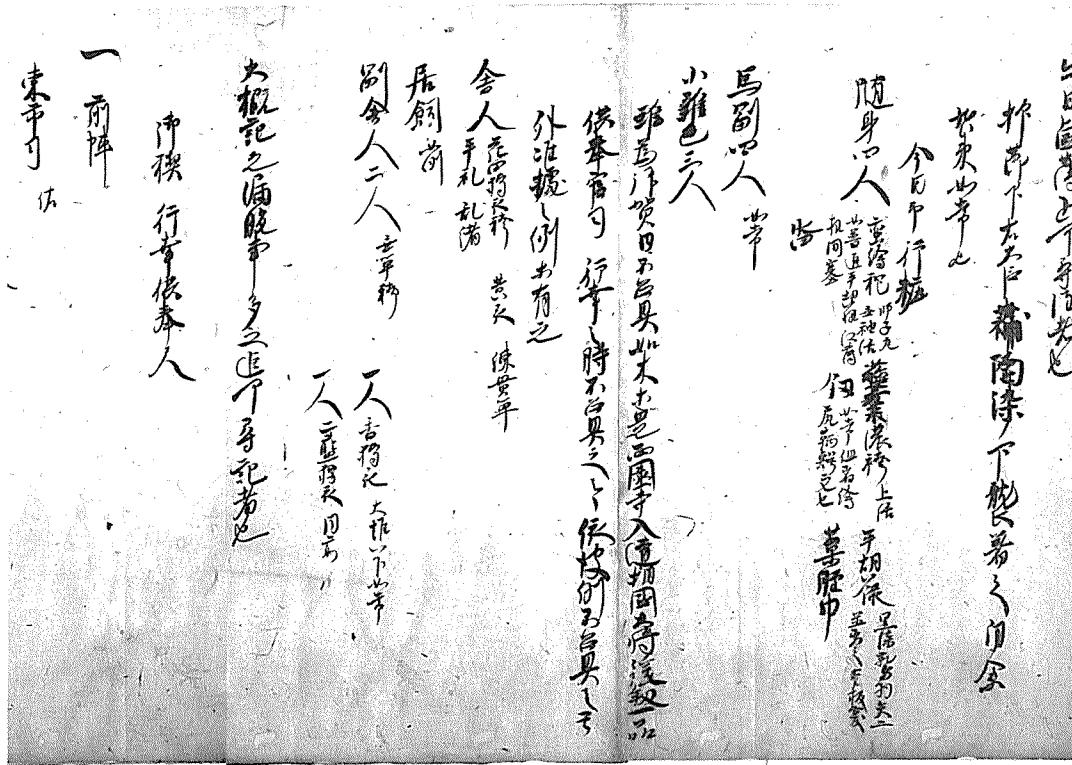
大嘗會記  
正安3年9月10月  
萬里小路宣房  
前大納言從一位万里小路宣房の日記抄出1冊。記者宣房は、万里小路資通の子で、建武3年(1336)正月、79歳で没す。万里小路一品とも称されたところから、その日記は『萬一記』とも通称される。奥書によれば、文亀元年(1501)5月27日、万里小路賢房によって、東坊城和長所持本を転写したことが知られる。伏見宮旧蔵本。内容は、後二条天皇の大嘗会に至るまでの記事で、正安3年(1301)9月8日—10月29日の記事11日分を収める。展示箇所は、同10月28日の河原頓宮への御禊行幸の記事である。この時、宣房は、頓宮へ供奉し、諸儀式に関与しており、こうしたことから、詳細な記事を書き記すことになったものと考えられる。なお、本記が記されている料紙は、万里小路家宛の書状を反故して使用しており、紙背文書中には、近江国高島郡舟木庄御閥に関する史料も散見される。

大嘗會記  
正安3年9月10月  
萬里小路宣房  
前大納言從一位万里小路宣房の日記抄出1冊。記者宣房は、万里小路資通の子で、建武3年(1336)正月、79歳で没す。万里小路一品とも称されたところから、その日記は『萬一記』とも通称される。奥書によれば、文亀元年(1501)5月27日、万里小路賢房によって、東坊城和長所持本を転写したことが知られる。伏見宮旧蔵本。内容は、後二条天皇の大嘗会に至るまでの記事で、正安3年(1301)9月8日—10月29日の記事11日分を収める。展示箇所は、同10月28日の河原頓宮への御禊行幸の記事である。この時、宣房は、頓宮へ供奉し、諸儀式に関与しており、こうしたことから、詳細な記事を書き記すことになったものと考えられる。なお、本記が記されている料紙は、万里小路家宛の書状を反故して使用しており、紙背文書中には、近江国高島郡舟木庄御閥に関する史料も散見される。

大嘗會記  
正安3年9月10月  
萬里小路宣房  
前大納言從一位万里小路宣房の日記抄出1冊。記者宣房は、万里小路資通の子で、建武3年(1336)正月、79歳で没す。万里小路一品とも称されたところから、その日記は『萬一記』とも通称される。奥書によれば、文亀元年(1501)5月27日、万里小路賢房によって、東坊城和長所持本を転写したことが知られる。伏見宮旧蔵本。内容は、後二条天皇の大嘗会に至るまでの記事で、正安3年(1301)9月8日—10月29日の記事11日分を収める。展示箇所は、同10月28日の河原頓宮への御禊行幸の記事である。この時、宣房は、頓宮へ供奉し、諸儀式に関与しており、こうしたことから、詳細な記事を書き記すことになったものと考えられる。なお、本記が記されている料紙は、万里小路家宛の書状を反故して使用しており、紙背文書中には、近江国高島郡舟木庄御閥に関する史料も散見される。

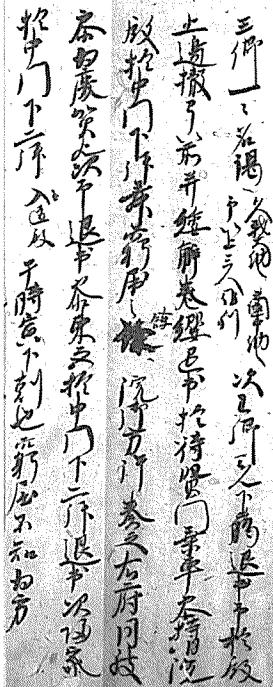
## 10 大嘗会記 正安3年9月—10月

前大納言從一位万里小路宣房の日記抄出1冊。記者宣房は、万里小路資通の子で、建武3年(1336)正月、79歳で没す。万里小路一品とも称されたところから、その日記は『萬一記』とも通称される。奥書によれば、文亀元年(1501)5月27日、万里小路賢房によって、東坊城和長所持本を転写したことが知られる。伏見宮旧蔵本。内容は、後二条天皇の大嘗会に至るまでの記事で、正安3年(1301)9月8日—10月29日の記事11日分を収める。展示箇所は、同10月28日の河原頓宮への御禊行幸の記事である。この時、宣房は、頓宮へ供奉し、諸儀式に関与しており、こうしたことから、詳細な記事を書き記すことになったものと考えられる。なお、本記が記されている料紙は、万里小路家宛の書状を反故して使用しており、紙背文書中には、近江国高島郡舟木庄御閥に関する史料も散見される。



### 11 園太曆 延慶2年

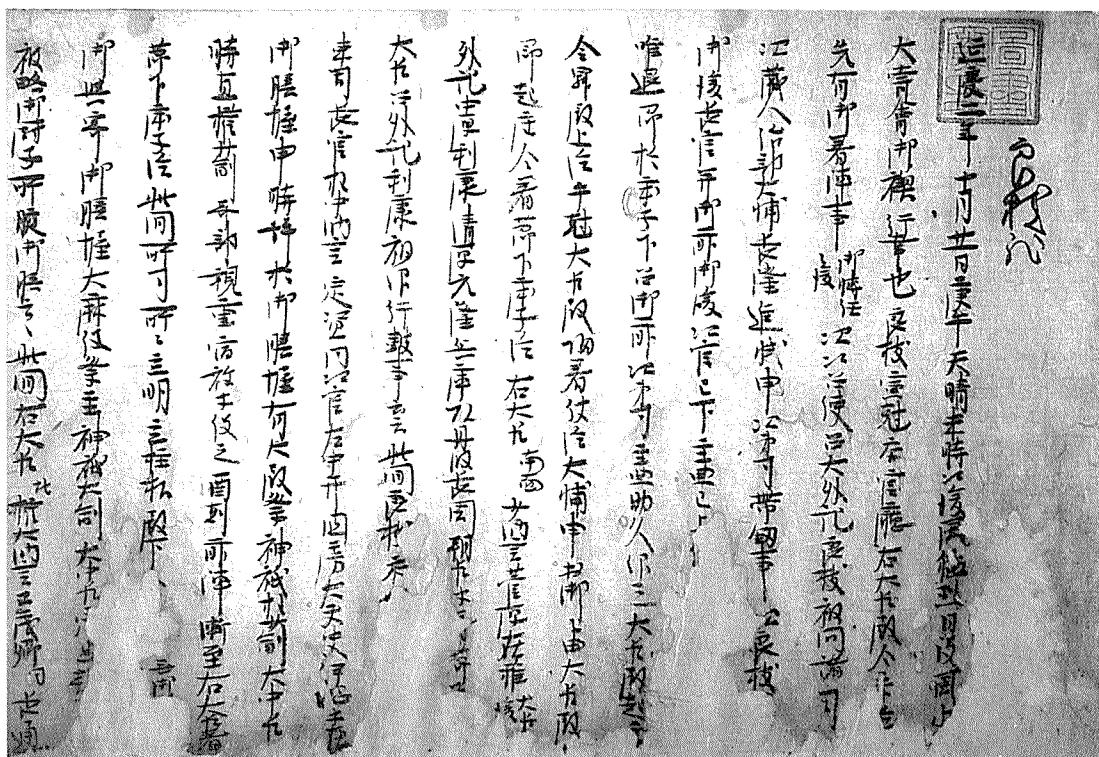
洞院公賢の花園天皇大嘗会御禊行幸の隨行記である。19歳で公卿として参加、当日は剣璽役を務めており、行幸の様は、この時の記録としては最も詳細である。公賢は『園太曆』の記者、『園太曆』の自筆本の伝存は稀であるが、本巻は別記であるものの自筆である。辰二刻（朝8時頃）東帶を着するところから、その日の行事の様が逐一記されているが、ここでは、行事最末の部分を展示した。記中には、常に剣璽に候して、御膳帳、御禊帳、そして又御膳帳と隨從する様子が記されており、還御後の名謁に及ぶ。「予於殿上辺撤弓箭并緩、解卷纓退出」から独自な私的記述で、装身具を解き、上皇方、東宮方、そして寅下刻（朝5時頃）家に戻り、祖父公守（入道殿）に挨拶したとする。「窮屈之余」「窮屈不知為方」等、一昼夜に近い隨行の疲労を記している。行列は、前陣・後陣の順に記した珍らしいものであるが、その前に自らの行粧が記されている。



## 12 大嘗会御禊行幸記 延慶2年

花園天皇の御禊行幸を記した3種の記録、良枝記（清原良枝）、経親卿記（平經親）、継塵記（三条実任）で、各々別筆である。もと、11と共に1巻になっていたもので、その関連記録の扱いであった。そのため、内題の「良枝記」等は、公賢の筆であり、各々自筆原本である可能性もあるが、基準となる筆跡が残っておらず定かではない。第1は「良枝記」で、記者は、大外記清原良枝、花園天皇等7代の侍読をつとめ、元弘元年（1331）79歳で没した。記録した当時は57歳、大外記の職は、上卿の下で公事を奉行したので、その職も記録も尊重された。展示箇所はその冒頭部で、寅刻（朝4時頃）の登庁から記されている。右大臣着陣の記事の後、「御転任之後」とあるのは、二条道平がこの10月15日に内大臣から右大臣になったためである。右大臣は当日の節下で、「召大外記良枝被問諸司□」とあり、良枝から知識を得た事が知られる。

11



12

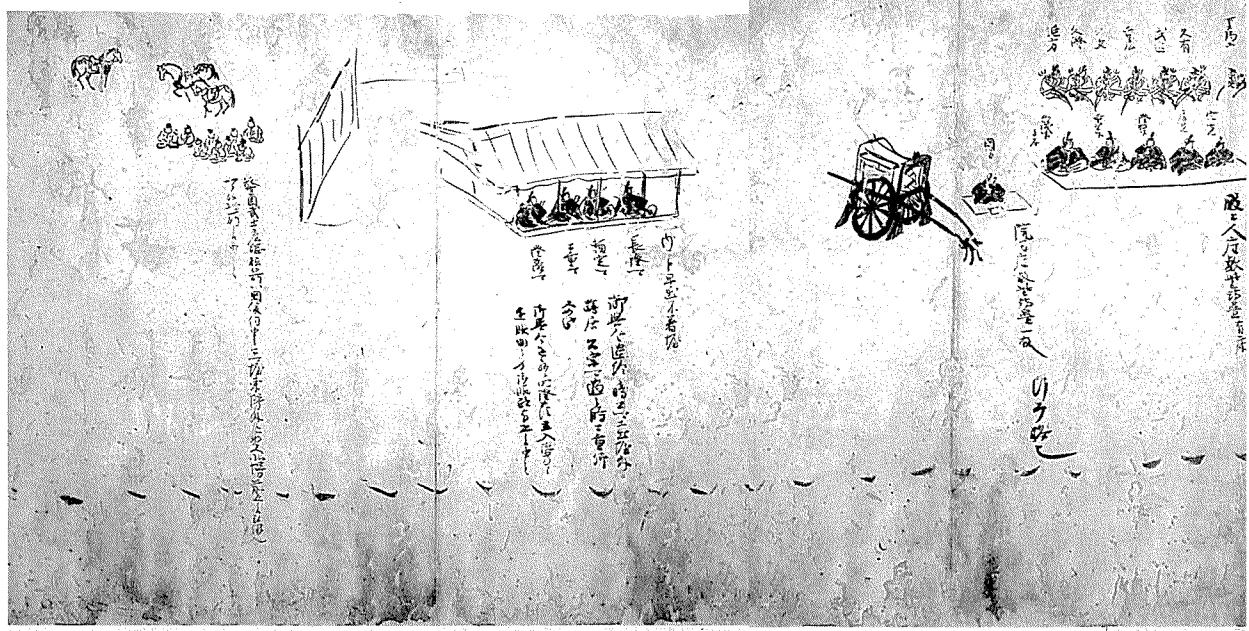
### 13 実泰公記 延慶2年11月

前左大臣從一位洞院実泰の日記1巻。記者実泰は、洞院公守の子で嘉暦2年（1327）8月、58歳で没す。後山本前左大臣と称されたところから、実泰の日記は、『後山本左府記』とも通称される。現在では、実泰の日記は、わずかに写本で知りうるのみで、その点から、本巻は室町期の写本とはいえ、善本のひとつとして位置付けることができる。本巻は、西園寺家の記録『管見記』のうちの1巻として伝来し、端裏書に「大嘗会部類記第六」とみえるところから、本来大嘗会部類記数巻のうちの1巻として書写されたものであると推定されるが、『管見記』中には、この1巻のみしか現存していない。内容は、延慶2年（1309）11月26日1日分の記事で、花園天皇の大嘗会日節会の詳細な記録であり、『実泰公記』別記と称すべきものである。



### 14 光嚴院御禊大嘗会記 正慶元年10月—11月

『花園院宸記』内の1巻。伏見宮旧蔵本。正慶元年（1332）に行われた光嚴天皇（20歳）の大嘗会に関する別記で、10月28日御禊行幸から11月16日豊明節会に至る関連行事を記したもの。展示箇所は巻頭部で御禊行幸を院御方（御父、後伏見院45歳）と朕（御叔父、花園院36歳）が御覧の様子を花園院御自身が描かれた絵である。二条高倉の角より東へ、南側に北に面して並ぶ。行幸の御列は北側（点線部）を進まれる。西の牛を放たれた女院



花園院 大嘗會部類

家記 後卷 乍官殿

巳日節會記

延慶三年十月廿日巳日節會セイ。

試為念  
佛神也。亥刻着束帶有文帶付留袋餉飼饗豐

金自保  
不魚食等

以後儀為初度內辨御所刷也。依番長邊添稱程及奉

列出日殿上人一人右中將有特相

當披拂御冠袋夏最

鑿天皇帝

隨身皆添垂襟番長秦賴茂前木持持

移馬四駕

頭上

奉畫峯秦武次下毛野元峯中臣重以上五人各禮移

御ノ隨身ノ今日賜移雜掌ノイ

二番長

下僕近衛賜小事佐盛請後馬舍人居飼雜色

卷

首不着移至侍賢門稅駕一車添入隨身等金嚴前

卷

聲之後行列先下駕進入至主坐次

卷

入會東門着東登廊北面座戸西二間撒伎座ノ藏事備ノ卷

卷

仰移襟座念敷軟次第占太外記同請司串首具候全次

卷

示諸卿念就外難請獨合起座出東門自垣外南行就南門

卷

外秉輶朝集嘗以三爲外辨座并之坐ノ卷

卷

通使定着座並間爭起座於傍外當着靴押笏坐

卷

13

(広義門院) 御車、東寄に両上皇が御同車になる御車、傍に院司(吉田国俊)、その西1列目殿上人座、東より能成・重資・隆博・有光・宗光、第2列随身座、左将曹秦延方・右将曹秦久澄以下秦久文・秦重弘・下野武近・秦久有、御車の東帳舎公卿座、右大臣(大宮季衡欠席)・葉室長隆・冷泉頼定・西園寺公重・油小路隆蔭等を装束を弁別して描く。本巻の巻頭部は虫損が甚しく欠字個所も多いが、この図の人名によって供奉の人々が確認できる。

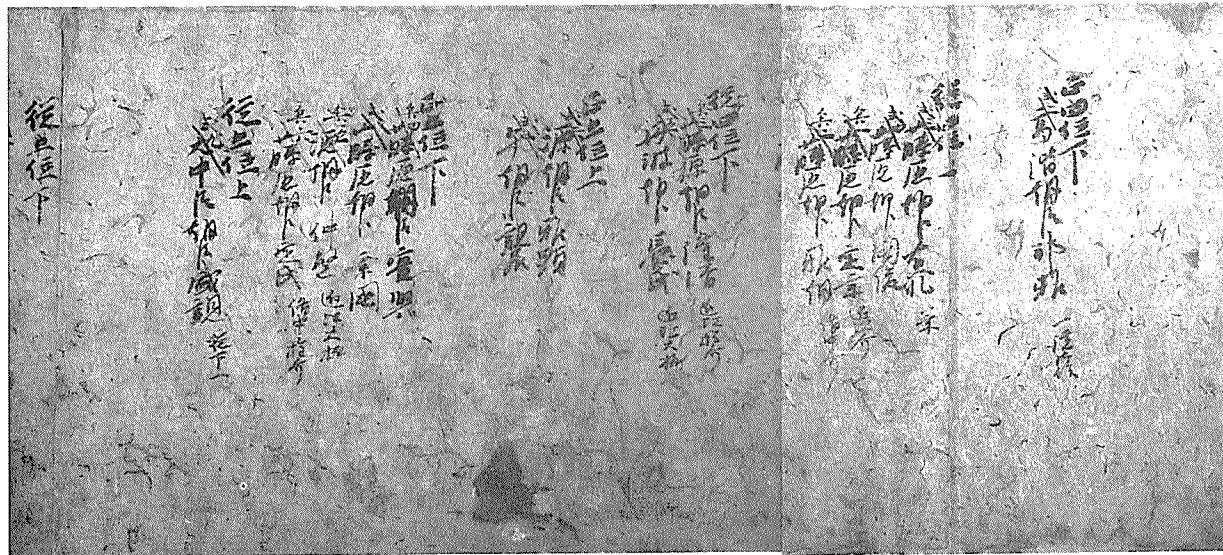
今日次眞一馬添立落馬仕合の事  
奉呈一文鳥陸梁之間於船人下馬更文と  
勾當物の不歸鳥又照相國の事

西

高倉天孫

卷

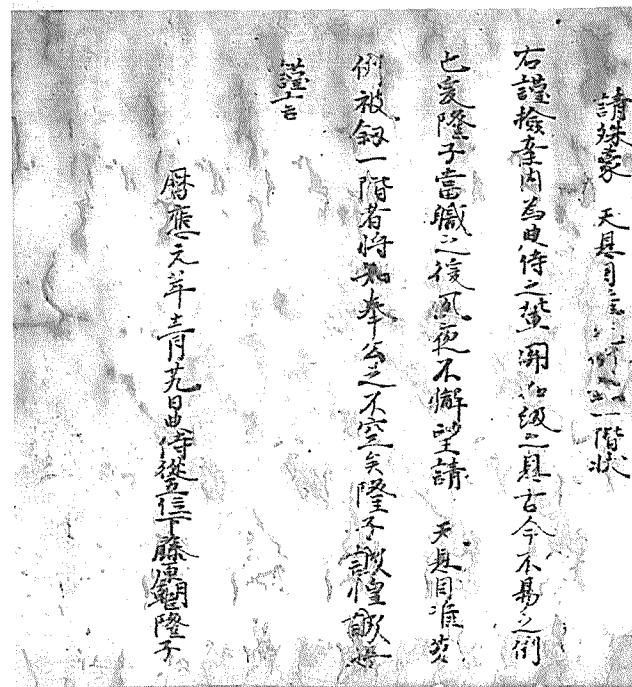
14

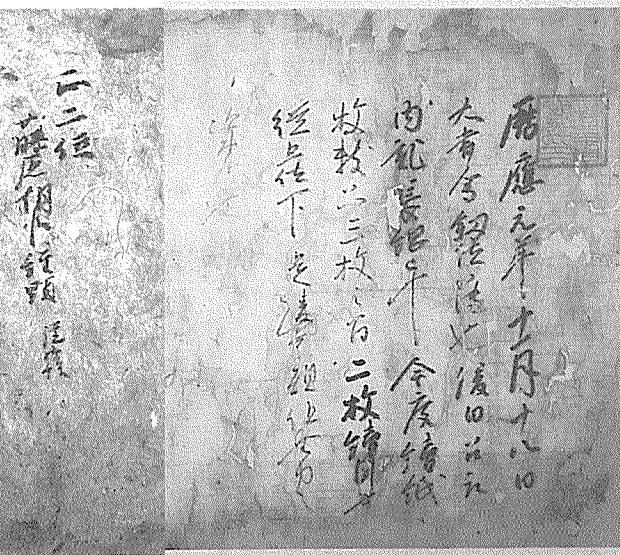


16

### 17 大嘗会女叙位成柄 厥応元年12月

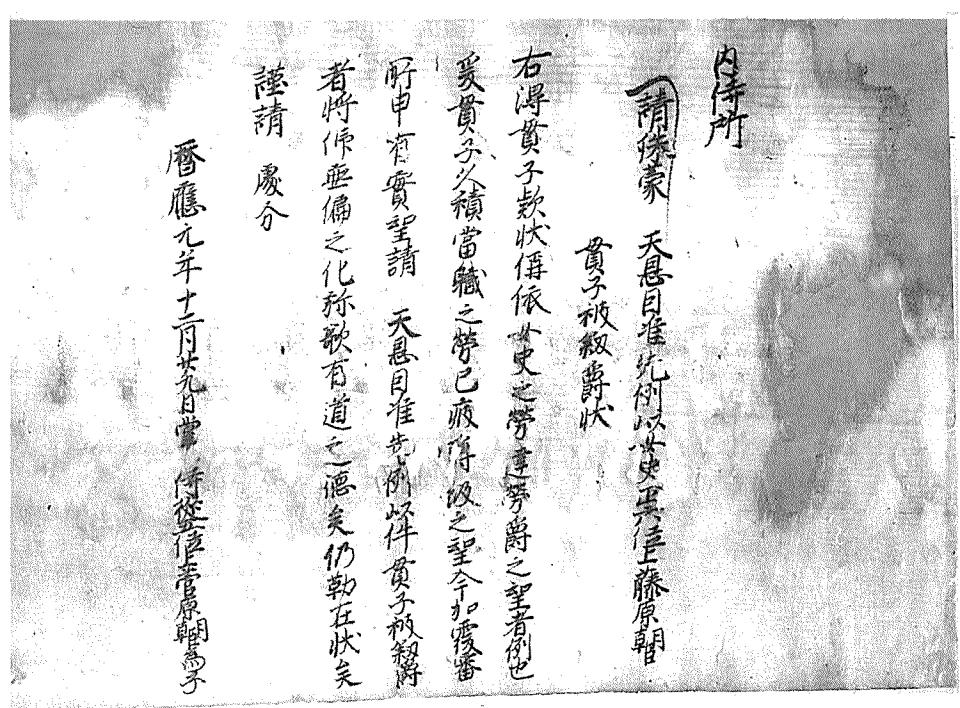
厥応元年12月29日に行われた光明天皇大嘗会女叙位で、内侍所の女官、五節舞姫等への叙位のなされた申文（成文）をまとめたもの。九条家旧蔵本。大嘗会女叙位の執筆を務めたのは、先の大嘗会叙位と同じく九条道教で、この時の女叙位の叙位簿原本、『大嘗会女叙位簿』（九・298）も九条家本中に伝存している。なお、本書の書名についてであるが、申請の認められた申文が成文であり、これを束ねて紙縁で結んだものが成柄または成束である。成柄は入眼後に執筆のもとに届けられることになっており、それが成卷されて今まで伝えられてきたのが本書である。従って形態上から厳密に言えば本書の現状は狭義の成柄ではないが、成文と成柄は一般的に同意語に用いられていることから、当部においても九条家で付された書名をそのまま採ったものである。





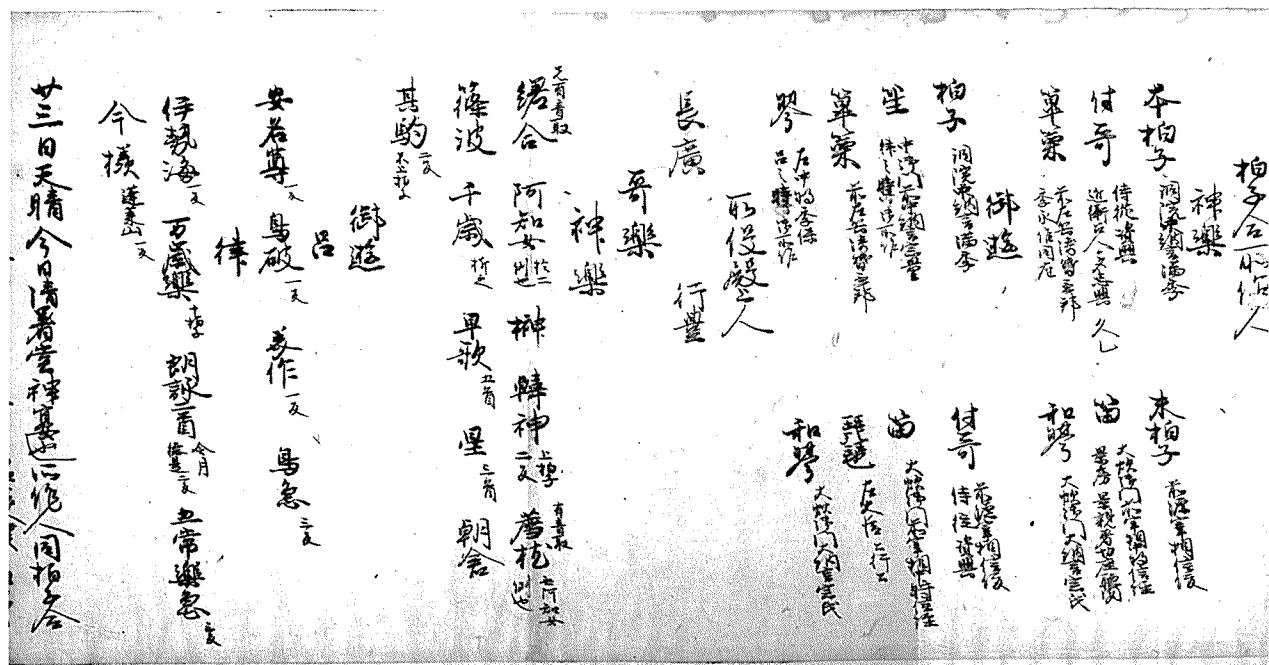
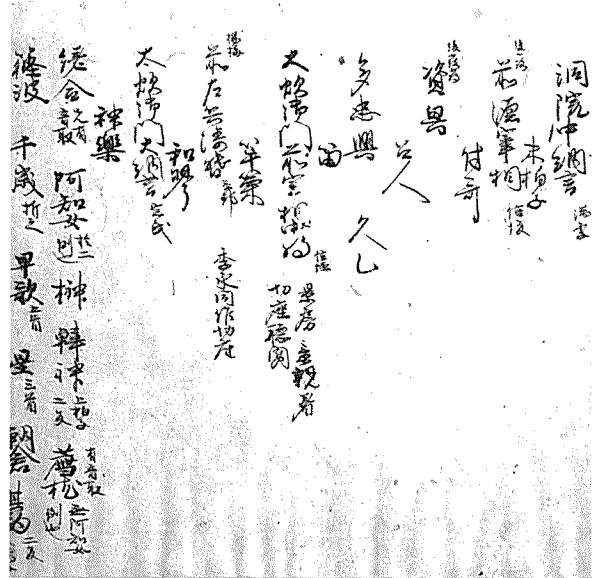
#### 16 大嘗会叙位簿 慶應元年11月

暦応元年（1338）11月18日（会前日）に行われた光明天皇大嘗会叙位の叙位簿原本である。巻頭に、大内記東坊城長綱のもとより取り寄せた旨の九条道教の識語がある。執筆を務めた道教は時に24歳、正二位右大臣皇太子傳。これが初度の叙位執筆であった。ちなみに悠紀国は近江、主基国は備中で、大嘗会國司除目は11月13日に行われている。九条家旧蔵本。本書は、南北朝期初頭の叙位簿原本であることでも貴重なものであるが、九条家本中には、これに先立つ10月18日に道教によってなされた叙位の習礼、『大嘗会叙位簿書様』（九・295）も伝存している。



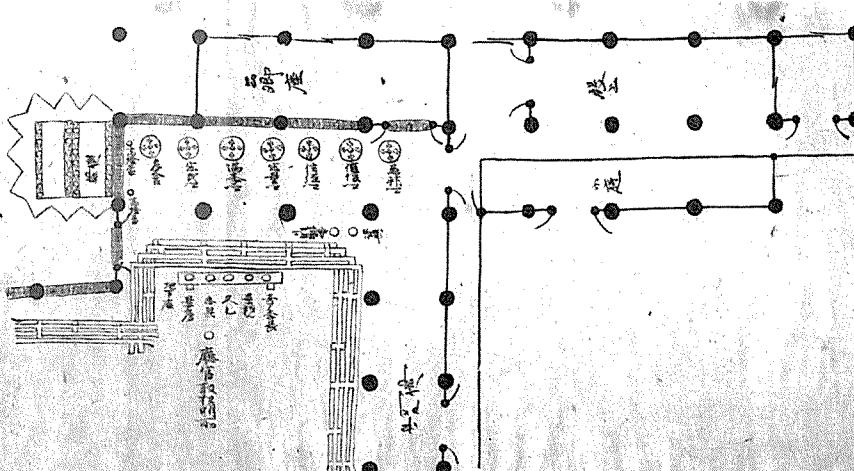
## 18 称光院大嘗会御記 応永22年

『看聞日記別記』11巻の内の1巻。伏見宮旧蔵本。応永22年(1415)に行われた称光天皇の大嘗会についての貞成親王の御筆御記。内容は10月27日官司行幸、29日御禊行幸と次第、11月9日方違行幸、13日神膳習礼、14日院拍子合、15日還幸、17日官司行幸、19日五節舞御覧、20日公卿淵酔・叙位、21日両国標山引、22日悠紀節会、23日主基節会・清暑堂神宴の記。その内、「御禊次第」「院拍子合」「節会・清暑堂神宴」について詳記する。展示箇所は、14日の院(後小松院)の拍子合における仙洞の御座敷の指図である。御簾内、屏風囲いの2畳の御座。楽所作人は御前側より琵琶—今出川公行、和琴—一大炊御門宗氏、拍子—洞院満季、笙—中御門宗量、笛—大炊御門信経、末拍子—綾小路信俊、篠篥—楊梅兼邦、殿上高欄脇、琴—四辻季保、付歌—綾小路資興、庭上地下座、左より笛—山井景房、召人—多忠興、同一多久乙、笛—山井景親、篠篥—安部季永(長)と並ぶ。御座に天皇と院が御同座で聴聞され、院御自身も御遊で律の笙と呂の筆を所作された。



十三日既而有詔請清暑堂御遊之記  
宿女久人因作院拍子合清暑堂記

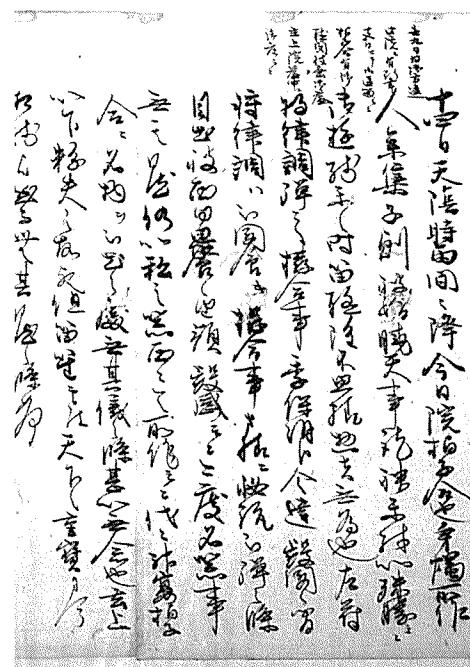
事日天晴介夜深極多也主上御遊可れ  
唐中直房清暑堂御遊同清暑堂有清暑堂  
品持律調等諸君坐之清暑堂御遊故作清暑



18

### 19 院拍子合清暑堂神宴記 応永22年11月

本書も18と同様、応永22年（1415）称光天皇大嘗会に関連する貞成親王の御記。伏見宮旧蔵本。内容は11月12日菊亭（今出川公行）における「清暑堂御遊之習礼」、14日仙洞（後小松院）における「院拍子合」、23日大嘗会後の「清暑堂神宴」と樂関係の事柄についての伝聞を記す。展示箇所は「院拍子合」の記述である。『徒然草』70段に「元応（後醍醐天皇）の清暑堂の御遊に、玄上（琵琶の名器）は失せにし比、菊亭大臣（今出川兼季、公行は玄孫）牧馬（玄上に次ぐ名器）を弾じ給けるに…」とある、大嘗会清暑堂の御遊に名器を用いる先例に言及する。「今度名器事無其沙汰、仍以私之器面々令所作云々、代々神宴拍子合ニ名物ヲ被出之處、無其儀之条、甚以無念也、玄上以下紛失之故歟、但笛・笙など天下之重宝于今相残歟、然而無其沙汰之条如何」と玄上等紛失の現況を承知しながらも、一代一度の盛儀に先例に準じえない不如意を述べる。本来は習礼として行われた院での拍子合が、清暑堂御遊にかかる一連の行事として行われるようになった事がこの記によってわかる。





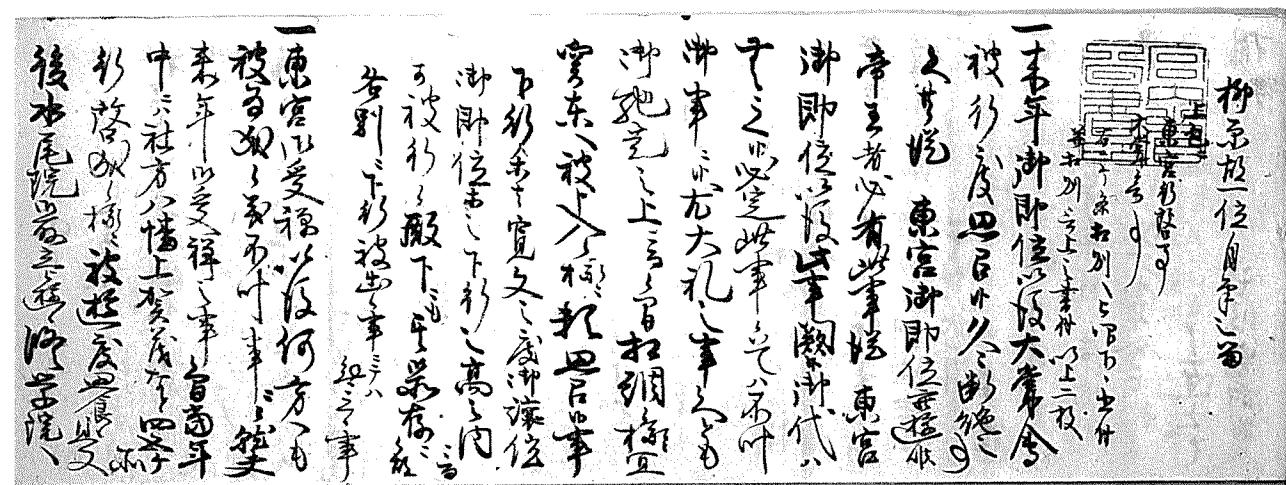
20

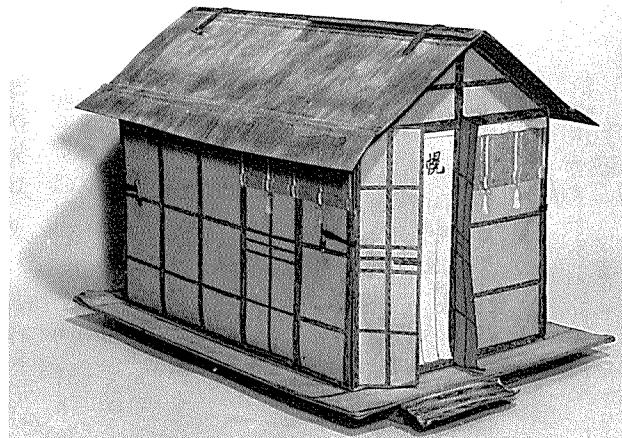
## 21 貞享度大嘗会儀=付両伝ヨリ所司代往来留

貞享4年(1687)の大嘗会は、後土御門天皇文正度以来9代220余年を経て再興された東山天皇の大嘗会である。本書はその経過について、朝廷側と幕府側との交渉の概要を記した写本である。朝廷側の窓口は武家伝奏の権大納言柳原資廉、幕府側は京都所司代土屋相模守政直である。冒頭に「柳原故一位自筆之留」とあり、柳原資廉の自筆記録から写したことが知られる。筆は葉室頬胤で、元文度大嘗会の折に写されたものと思われる。内容は3つに分けることができ、(1)は朝廷側からの東宮より即位する際は大嘗会があること、経費は譲位即位等の下行高の中で行うとして、大嘗会を再興したい旨を記した書状とこれに対する土屋政直の回答である。(2)は翌年の4月に即位式を行い、その年11月に大嘗会を行いたいと伝え、承認がなければ即位式を8月以降に延期し、翌々年に大嘗会を行いたいこと、儀式は随分省略する旨を述べている。(3)は大嘗会は公武長久のためであると述べた朝廷側の口状の覚である。大嘗会の再興について、当初幕府は相当難色を示していたが、朝廷側からの強いはたらきにより行われたことが知られる。葉室家旧蔵本。

20 文正 度 大嘗会下行切符案 文正元年

文正元年（1466）に行われた後土御門天皇の大嘗会に向けて、大嘗会伝奏甘露寺親長（従二位前権中納言按察使）が大嘗会の費用を負担する室町幕府の地方頭人絆津之親（御禊大嘗会奉行）との間にやりとりした、費用の下行要請、下行経過、実行などに関する各文書（大嘗会関係140通、万機旬関係19通）を書き留めたもの。室町幕府には前回永享度（後花園天皇、永享2年）大嘗会の引付類が保管されていたのに対し、朝廷側にはこれに類するものがなかったため、親長が今後の参考用に作成したものと思われる。親長には、これとは別に、大嘗会伝奏を命じられた同年2月15日に始まり、大嘗会当日の12月18日（文正度大嘗会は度重なる触穢等により12月に延引して挙行された）に到る準備経過を記した別記があり、両者を併せることにより文正度大嘗会の規模と遂行経過は詳細に知られるのである。但し親長が本書を作成した意図とは裏腹に、大嘗会はこの後221年間中絶する。



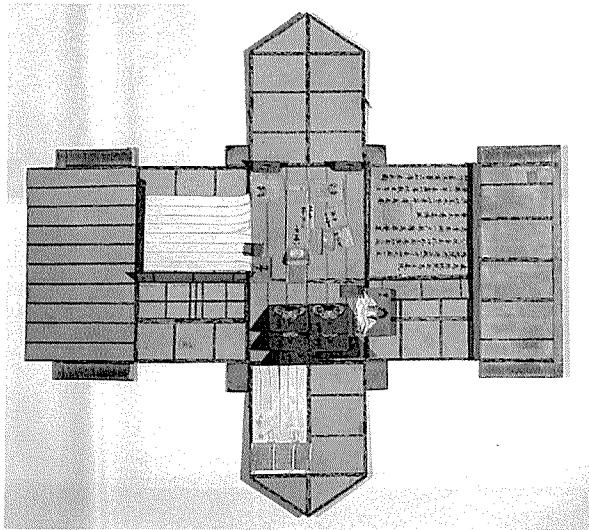


悠紀殿立起

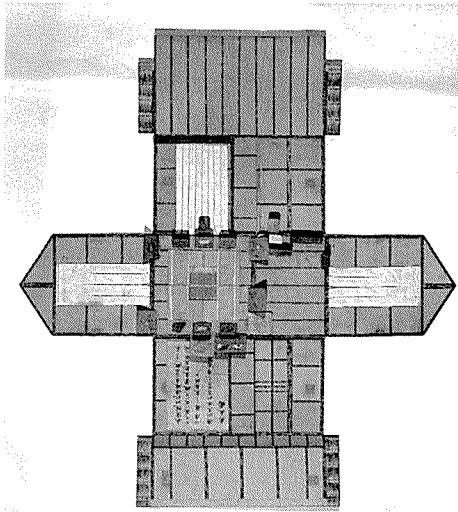
## 22 大嘗宮悠紀殿・廻立殿起図 貞享度

貞享度大嘗会の立起図で大嘗宮庭上之図に悠紀殿・主基殿・廻立殿を各々起し、配置するものであるが、平面図は大図なため悠紀・廻立殿のみを展示する。大嘗宮の場所は紫宸殿の南庭、廻立殿は紫宸殿の東に建てられた。悠紀殿・主基殿は全く同じ構造で造られ、南北5間(約9.1メートル)、東西3間(約5.5メートル)の高床式の建物。内部は北の方3間を室(内陣)、南の方2間を堂(外陣)の2つに分け、その間に白幌が垂れている。軒高は1丈2尺5寸(約3.8メートル)、屋根は切妻、萱葺、棟に堅魚木がある。書き方は詳細で床の筵の下の竹簀子まで描かれ、調度品・人物なども別個の紙片に丁寧に描き、定位置に置かれている。作製時期は不明であるが、貞享頃と思われ、本書箱書により茨城県塙載氏より献納されたことが知られる。





悠紀殿内図

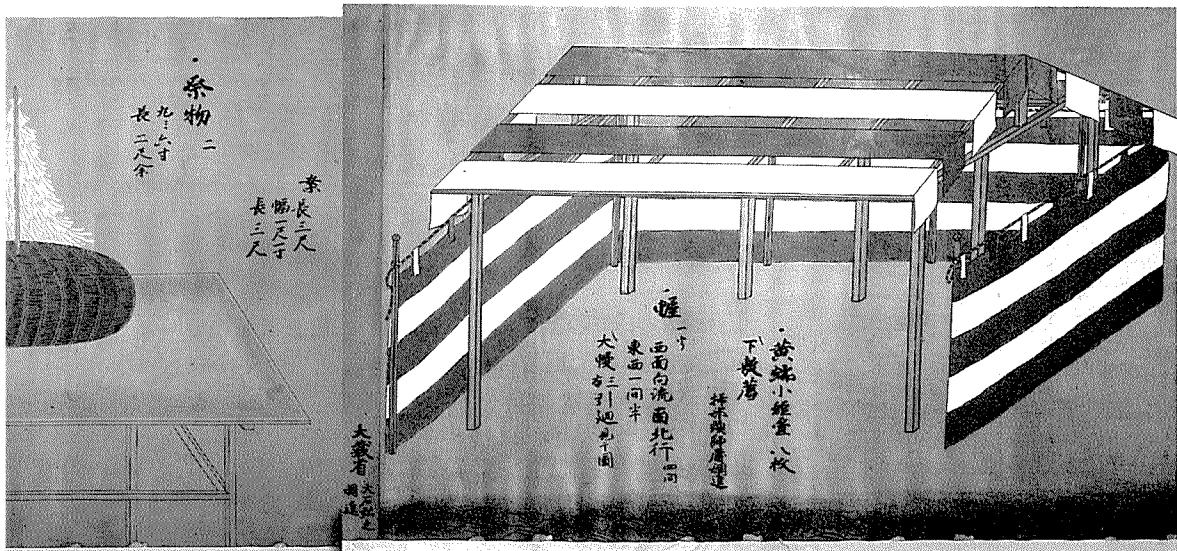


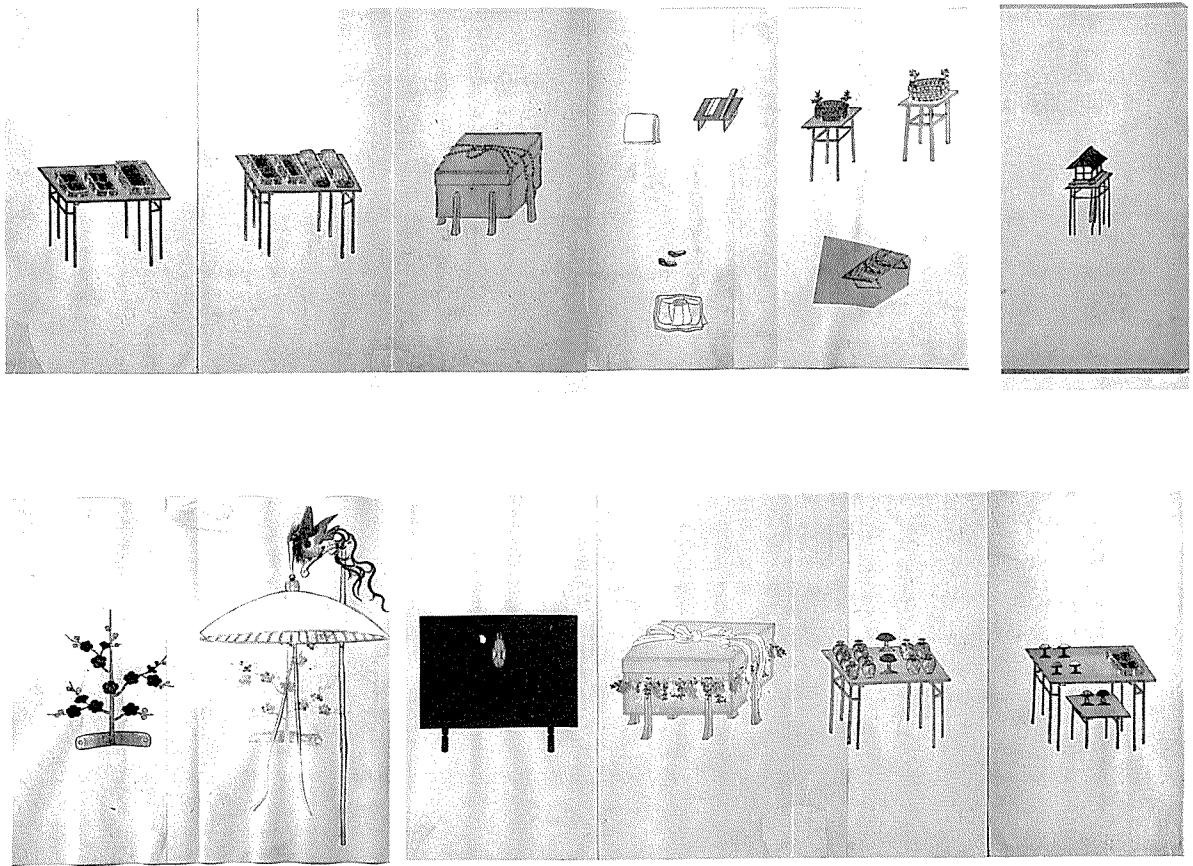
廻立殿内図

22

### 23 貞享度践祚大嘗祭調進書附図

貞享度大嘗会における国郡卜定から采女・御巫・猿女衣までの諸司調進物の目録 1巻及び彩色図 1巻。出納平田職直の奥書によれば、本書は後鑑として作製し、彩色図は4巻あったことが知られるが、現存は1巻のみである。展示箇所は、荒見川祓の舗設調度類である。祭場は紙屋川の平野社北東の流れのほとりに幄1宇を建て、そこに悠紀・主基の2座を設ける。祭物は荒布で包んだ木箱に薦をかぶせ、その上に大麻を立てる。贋物は三つの土器に散米、人形の贋物、左綱・右綱解縄2本を折敷に載せたものである。平田家旧蔵本。

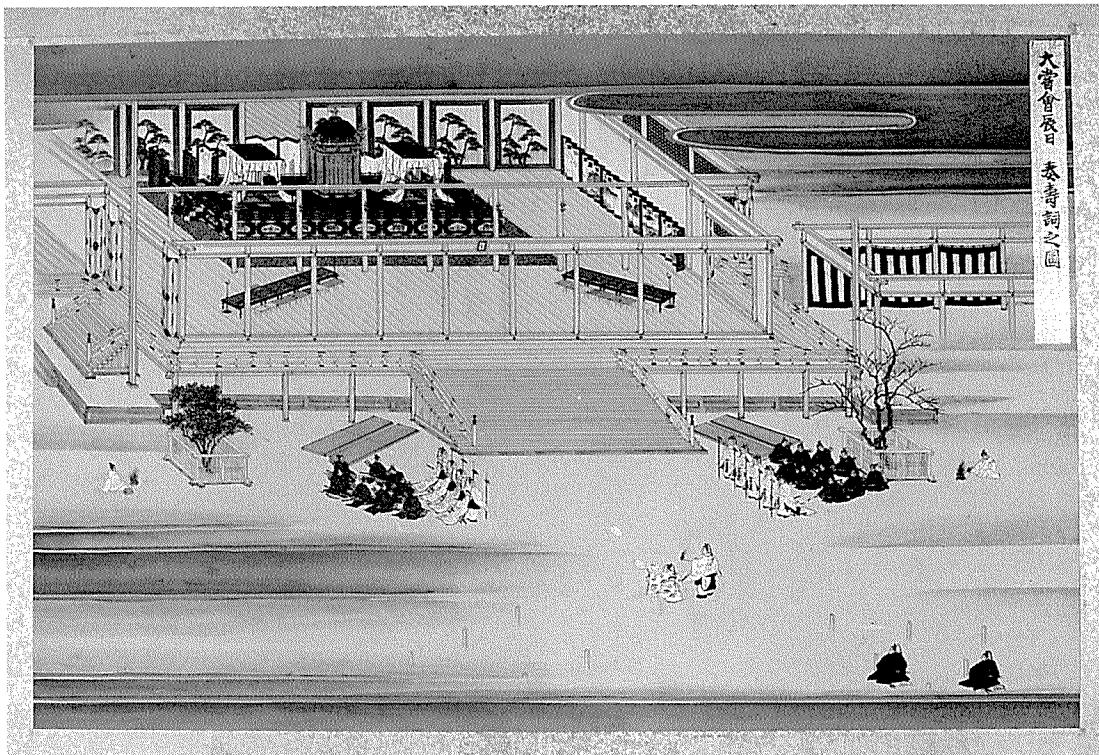




24

#### 24 貞享度大嘗会調進物絵図

貞享度大嘗会に調進された装束・調度品の彩色絵図の小形折本。表裏に直書13葉・貼絵43葉が描かれている。展示箇所は、大嘗宮内の調度品、黒木灯籠・和妙案・荒妙案・御沓・御扇・御櫛・神御单・唐櫃、神饌八足小机上に神食薦・御食薦・箸宮・枚手筥（含本柏）、雀手にそれぞれ盛った御飯筥・鮮物四種筥・干物四種筥、御菓子四種筥・米御粥・粟御粥、手前に和布羹・鮑羹、白御酒・黒御酒・御盃、唐櫃、御箸、渡御の際天皇の御上を覆う菅蓋、冠にさす挿頭花などである。平田家旧蔵本。



29

### 29 公事錄附図

『公事錄』は、恒例45冊、附図2帖、臨時22冊、附図1帖、目録1冊からなり、中山忠能等編、北小路隨光・樋口守保画。江戸時代後期に行われていた宮中行事の実情を、絵図を含む記録として残すことを目的とした著作で、明治20年（1887）12月に完成、明治天皇に献上された。附図は大形の折帖に極彩色で描かれ、大嘗会の図は臨時部中に9図ある。(1)国郡卜定、(2)荒見川祓、(3)御禊、(4)渡御悠紀殿、(5)主基國風俗舞、(6)辰日奏寿詞、(7)巳日田舞、(8)清暑堂御遊、(9)豊明節会久米舞。展示は(5)ー(7)、図版は(6)。

見於山也能食可余伊都國阿佐比加計  
久裳理那幾与乃波苗遠美須良志

小松原子日有遊客

比幾都禮互从布乃祿能比乃古津漫良

千止勢能賀計尔安曾布毛呂比登

藏部卿梅花添榮色

佐幾曾比互由岐子理外那國志官多倍者

安女乃志多那遍互毛良佐奴女久見乎者  
志久禮尔裳之苗加佐波良乃佐登

已帖二月

愛智河水結水聲靜

与波奈倍互於佐万苗止幾乎惠知可波乃  
奈見毛遠止勢須古保理為余々利

安河千鳥群遊

遠能加止知佐古吉呂裳也須加波尔  
半禮為互阿普布登毛知止理賀毛

位山白雪積表豐年之瑞

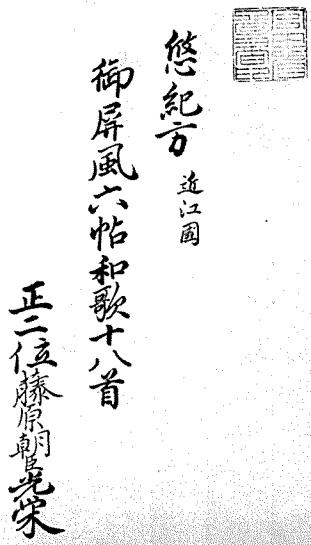
久良井也万多可久都裳禮苗志良由幾者  
由多从岐登之能志苗之那利計理

元文三年十一月一日

26 大嘗会和歌詠進日記 元文度

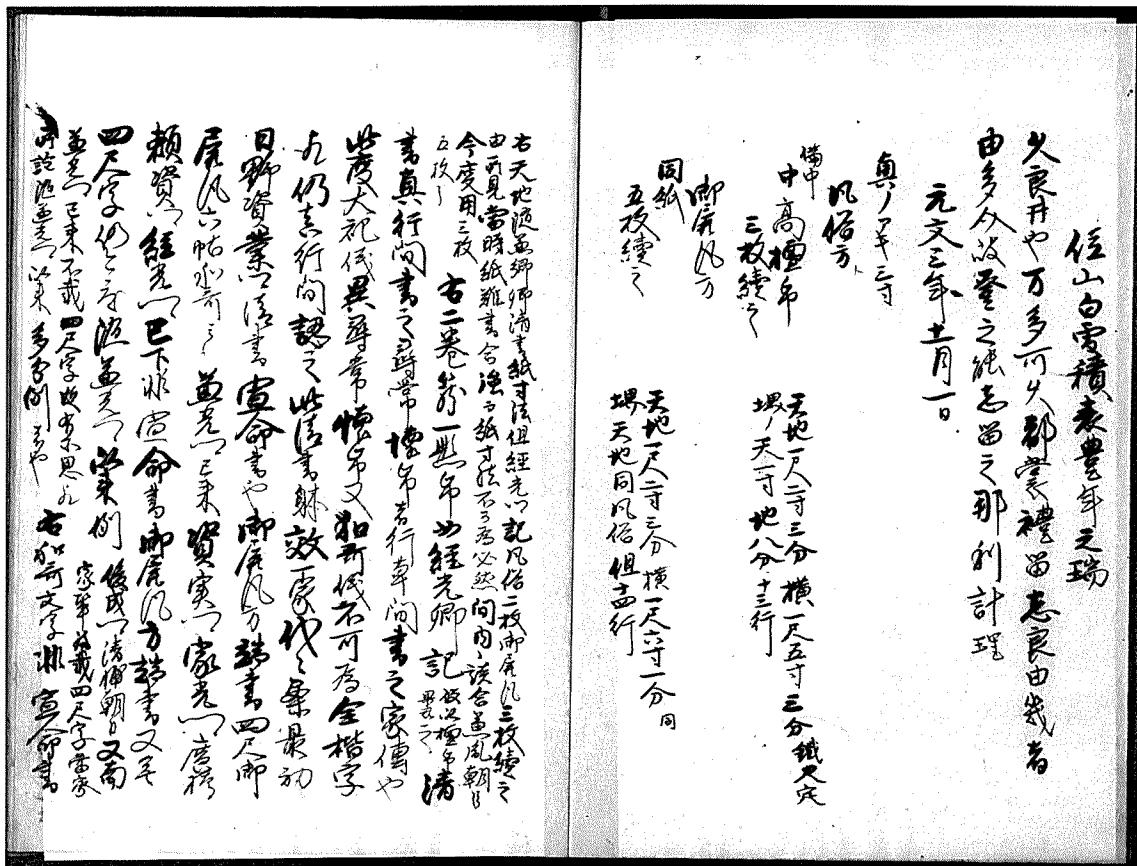
元文3年7月21日、大嘗会和歌悠紀方作者に撰せられてより、同年11月22日までの間の烏丸光栄の日記。約270年ぶりに再興された和歌詠進の儀の経緯を詳しく記しており、先例を調べながら、諸事復興した様子が窺われる。末に光栄の奥書があり、女婿である広橋兼胤から、大嘗会和歌作者をつとめる家柄であった広橋家累代の記録を借りられたことを「奇遇大幸」としており、宣旨や請文などのやりとりにも、鎌倉期の勘解由小路経光の記録を参考にしたことが、本文中随所にみられる。展示箇所は11月1日和歌を提出した日の記文で、和歌を清書した書様や紙の寸法を示しており、25と照合すると実に細かく記録していることがよく解る。巻末に安永2年(1773)6月20日、日野資枝から借りて写した旨の柳原紀光の書写奥書がある。因みに柳原紀光も明和8年(1771)度大嘗会主基方の和歌作者をつとめている。柳原家旧蔵本。

甲帖  
正二月  
義尾山朝日初昇



## 25 悠紀主基屏風和歌 元文度

元文3年（1738）桜町天皇大嘗会に際して詠進された悠紀主基屏風和歌。悠紀方作者烏丸光栄、主基方作者日野資時が各々自筆で記し、行事弁に提出した原本を1冊に綴じたものである。貞享度に再興された大嘗会では、経費節減のため、和歌屏風の調進は省略され、和歌の詠進はなかった。大嘗会和歌はこの元文度に至って復興したのである。展示箇所は、烏丸光栄の悠紀方の屏風和歌で、中高檀紙を5枚継ぎ、和歌18首が書かれている。26は、烏丸光栄の日記の写しであるが、元文3年11月1日条の記文には、和歌の書様や紙の寸法等が細かく記されており、その記文通りの原本が見られるのは興味深い。烏丸光栄はこの当時前権大納言で50歳、歌人、歌学者として高名で、「今人丸」と称されたといわれる。外記局本。



初冬

村をの郷まじいづるへ家をもす有  
紅葉

むそをの郷まじいづるへ家をもす有  
弓一き弓の山さんいのち弓紅葉の鶴園まじうね

仲冬

霜多の鶴多白鶴

冬の鶴の身とし知ぬ鳥つむ鳥の弓弓の鶴の歌

晚冬

名森山の下宿宿宿へ家

冬の山はうこね寄よはううの年と候るをなげか

淡冷泉院學

悠紀方

風俗和音十首

後三位行武大捕友原朝臣樂集

稻善寺

田中村

春ふ曾年苗田中乃 稲の伊奈革良者千世平積

支那 沖世の多女志曾

神樂寺

三上山

常盤<sup>モミ</sup>美賀義乃山乃榎葉<sup>イハヤ</sup>木綿歌<sup>ヒツヅカ</sup>天<sup>アマ</sup>右登

保波曾須苗

辰日集入音聲 長<sup>ナガ</sup>山

巖根<sup>イハヤ</sup>長良乃山乃長<sup>ナガ</sup>仁<sup>アマニ</sup>久<sup>クル</sup>万歳<sup>マツザイ</sup>伴<sup>ハシ</sup>聲

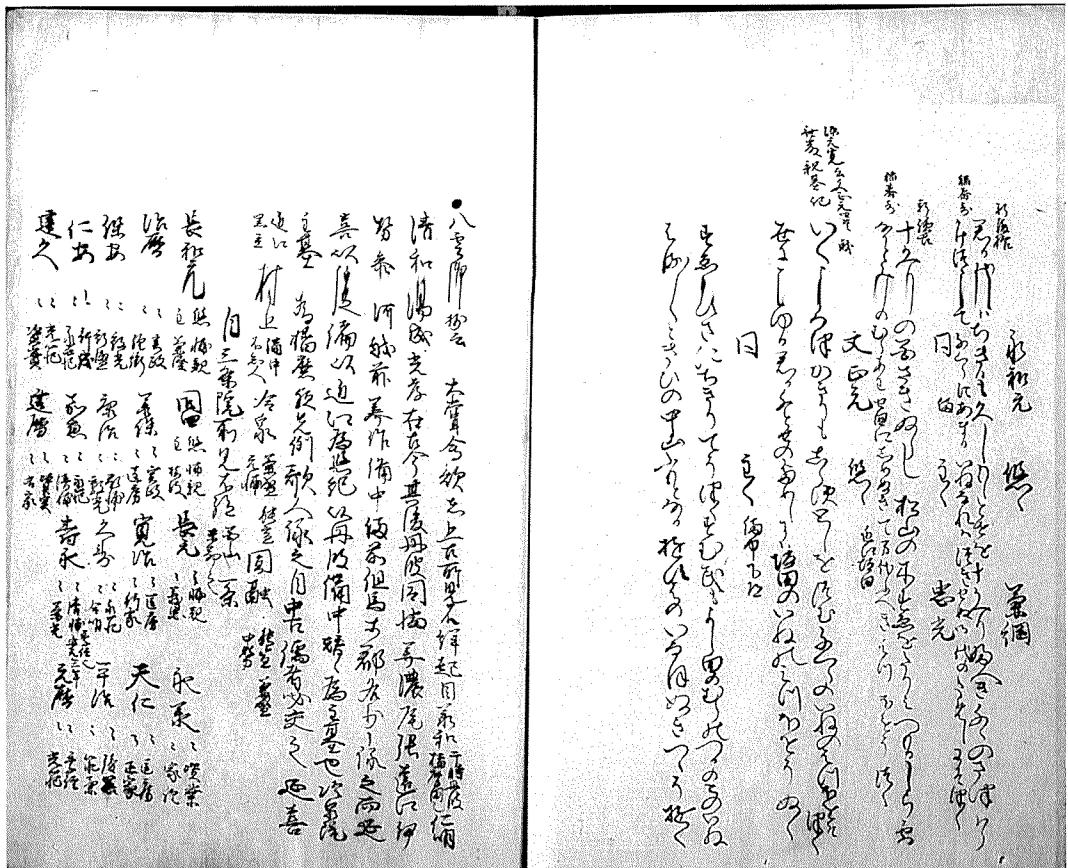
曾須由苗

同月樂破 五井

毛<sup>アシ</sup>人<sup>ノ</sup>波<sup>タ</sup>津波<sup>タ</sup>勢奴玉升者寶<sup>タ</sup>乃沖代仁

## 27 大嘗会悠紀主基詠歌

大嘗会和歌の集成。内容は3部に分かれる。(1)は古今集から新後拾遺集までの勅撰集入集の大嘗会和歌の抜き書。(2)は寛平9年(897)から寛延元年(1748)度までの大嘗会和歌作者名。(3)が仁明天皇(833)以降の大嘗会和歌を収める主要部分である。仁明天皇から一条天皇までは風俗歌のみで歌数も一定せず、三条天皇長和元年(1012)度に屏風歌が加わり、後一条天皇長和5年度以後、風俗歌10首、屏風歌18首の形式になる。鳥羽・崇徳・近衛天皇の3代ほか若干欠ける部分があるが、鎌倉初期まではほぼ有り、後嵯峨天皇仁治3年(1242)度は主基方のみで、その後は室町期後花園天皇永享2年(1430)度、江戸期元文3年度、桃園天皇寛延元年(1748)度を載せて終っている。和歌の書様や文字遣いも万葉体、宣命体、仮名と様々で、原資料の形を遺している部分もあるとみられ、数次の書き継ぎによって成立した書とみられる。これだけの量の大嘗会和歌を集成したものはほとんど他になく、貴重な資料である。御所本。



## 28 大嘗会和歌部類

大嘗会和歌の集成。27とは別本。内容は4部に分かれる。(1)は天武天皇2年以降の大嘗会の年月と悠紀・主基国名を記したもので、光孝天皇元慶8年(884)以後は和歌作者名も注記され、三条天皇以後は年月日、国名、作者名を挙げ、後土御門天皇文正元年(1466)度までを載せる。(2)が大嘗会和歌の集成で、仁明天皇から白河天皇までは27と同じである。その後は堀河・鳥羽・近衛・六条天皇の悠紀方の和歌を、各々の作者の家集から引載し、鎌倉期は後嵯峨天皇仁治3年度の悠紀方の屏風歌のみで、末に永享2年度の大嘗会和歌を揃えて載せている。(3)は勅撰集、私撰集等から抜き出した大嘗会和歌を、天慶9年(946)以降文正元年度まで、年代順に並べている。(4)は『八雲御抄』『袋草子』等から大嘗会関係記事や文書書式を抜き書きしたもの。27とはやや異なるが、大嘗会和歌に必要な要項を集めて編纂されたものとみられ、合わせて貴重な資料といえよう。

鷹司家旧蔵本。なお、本書には類本があって、当部蔵『大嘗会和歌集』1冊(函号155・276)も同じ書である。

## 大嘗会関係資料展示目録

|    |             |                          |         |        |         |               |        |
|----|-------------|--------------------------|---------|--------|---------|---------------|--------|
| 1  | 大嘗会代々例      | 平城天皇—後土御門天皇              | 九条政基筆   | 1卷     | 九・237   | (平城天皇—後土御門天皇) |        |
| 2  | 大嘗会御禊部類記    | 承平2年・天慶9年                | 鎌倉期写    | 1卷     | 九・218   | (朱雀天皇・村上天皇)   |        |
| 3  | 大嘗会神膳次第     | 天仁元年11月 江記抜書             | 鎌倉期写    | 1卷     | 九・219   | (鳥羽天皇)        |        |
| 4  | 大嘗会記        | 治暦4年 師実公記・久寿2年 忠通公記      | 平安末期写   | 1卷     | 九・222   | (後三条天皇・後白河天皇) |        |
| 5  | 大嘗会卯日御記     | 保安4年11月<br>藤原忠通記         | 平安末期写   | 1卷     | 九・220   | (崇徳天皇)        |        |
| 6  | 大嘗会次第       | 保安4年11月<br>藤原忠通作         | 鎌倉期写    | 1卷     | 九・228   | (崇徳天皇)        |        |
| 7  | 後鳥羽院御記      | 建暦2年10月<br>後鳥羽天皇宸記       | 伏見天皇宸筆  | 1卷     | 伏・745   | (順徳天皇)        |        |
| 8  | 御禊大嘗会御記     | 正応元年10月—11月<br>(伏見院宸記の内) | 伏見天皇宸記  | 伏見天皇宸筆 | 1卷      | 伏・520         | (伏見天皇) |
| 9  | 大嘗会御記       | 正応元年11月<br>(伏見院宸記の内)     | 伏見天皇宸記  | 伏見天皇宸筆 | 1卷      | 伏・520         | (伏見天皇) |
| 10 | 大嘗会記        | 正安3年9月—10月<br>万里小路宣房記    | 万里小路賢房写 | 1冊     | 伏・199   | (後二条天皇)       |        |
| 11 | 園太曆         | 延慶2年10月<br>洞院公賢記         | 洞院公賢自筆  | 1卷     | 415・309 | (花園天皇)        |        |
| 12 | 大嘗会御禊行幸記    | 延慶2年 良枝記・経親卿記・継塵記        | 鎌倉期写    | 1卷     | 415・307 | (花園天皇)        |        |
| 13 | 実泰公記        | 延慶2年11月<br>(管見記の内)       | 洞院実泰記   | 室町期写   | 1卷      | F11・1         | (花園天皇) |
| 14 | 光嚴院御禊大嘗会記   | 正慶元年10月—11月<br>(花園院宸記の内) | 花園天皇宸記  | 花園天皇宸筆 | 1卷      | 伏・519         | (光嚴天皇) |
| 15 | 大嘗宮并廻立殿指図   | 暦応元年                     | 南北朝期写   | 1卷     | 九・1050  | (光明天皇)        |        |
| 16 | 大嘗会叙位簿      | 暦応元年11月                  | 原本      | 1卷     | 九・294   | (光明天皇)        |        |
| 17 | 大嘗会女叙位成柄    | 暦応元年12月                  | 原本      | 1卷     | 九・307   | (光明天皇)        |        |
| 18 | 称光院大嘗会御記    | 応永22年<br>(看聞日記別記の内)      | 貞成親王御記  | 貞成親王御筆 | 1卷      | 伏・741         | (称光天皇) |
| 19 | 院拍子合清暑堂神宴記  | 応永22年11月<br>貞成親王御記       | 貞成親王御筆  | 1卷     | 伏・995   | (称光天皇)        |        |
| 20 | 文正度大嘗会下行切符案 | 文正元年<br>甘露寺親長記           | 甘露寺親長自筆 | 1卷     | 509・92  | (後土御門天皇)      |        |

|    |                                |        |          |     |         |              |
|----|--------------------------------|--------|----------|-----|---------|--------------|
| 21 | 貞享度大嘗会儀=付両伝ヨリ所司代往来留            |        | 葉室頬胤写    | 1 冊 | 葉・1448  | (東山天皇)       |
| 22 | 大嘗会悠紀殿・廻立殿起図<br>(貞享度大嘗会竝三殿図の内) |        | 貞享写      | 2 点 | 503・188 | (東山天皇)       |
| 23 | 貞享度践祚大嘗祭調進書附図                  |        | 平田職直自筆   | 1 卷 | 516・256 | (東山天皇)       |
| 24 | 貞享度大嘗会調進物絵図                    |        | 貞享写      | 1 帖 | 516・38  | (東山天皇)       |
| 25 | 悠紀主基屏風和歌<br>(元文度大嘗会関係文書の内)     | 鳥丸光栄等詠 | 元文 3 年原本 | 1 冊 | 511・51  | (桜町天皇)       |
| 26 | 大嘗会和歌詠進日記                      | 鳥丸光栄記  | 安永 2 年写  | 1 冊 | 352・223 | (桜町天皇)       |
| 27 | 大嘗会悠紀主基詠歌                      |        | 江戸期写     | 1 冊 | 502・15  | (仁明天皇一桃園天皇)  |
| 28 | 大嘗会和歌部類                        |        | 江戸期写     | 1 冊 | 鷹・189   | (仁明天皇一後花園天皇) |
| 29 | 公事録附図 臨時公事之図                   |        | 明治原本     | 1 帖 | E 1 ・ 1 |              |

